

千住七福神巡り 2024



2025年1月

旅のチカラ研究所 植木圭二

年明け早々、あるイベントに参加して東京都足立区北千住の七福神「千寿七福神」を巡ってきた。距離も時間も手頃で、江戸時代の千住を知ることができた。

■千住七福神巡り

千住は日光街道の最初の宿場として江戸時代初期に開かれ、繁栄した。さらなる活性化のために千住にある千の寿（ことぶき）を呼びよせるべく1993年に千寿七福神巡りを起こした。

巡る場所は足立区の北千住駅周辺で、北千住駅をスタートして隅田川と荒川に囲まれた地域の常磐線の西側になる。ちなみに南千住駅は足立区ではなく荒川区で、現在は全く別の街とっていいだろう。



【千住周辺の地図】

今回のイベントは私が勤めていた会社のOB会のイベントで、午前11時に北千住駅に集合し、地元NPO法人のガイドの先導で七福神巡りに出発する。

最初に訪れた「仲町氷川神社」に弁財天が祀ってある。小ぢんまりとしていて、いかにも地元根付いて地元民に愛されているという神社だ。

参加者たちは賽銭を入れ参拝する。弁財天なので賽銭をはずんでいるのだろう。私は旅の最初の参拝は旅の安全を祈願すると決めており、もちろん賽銭ははずんだ。

他の七福神を祀ってある神社も参拝するが、どの神社も何となく似ていてあまり区別がつかない。しかしどこも風情があってなかなか良い雰囲気をしており、特に大き過ぎず小さ過ぎずのサイズ感が私好みと言ってもいいだろう。



【仲町氷川神社の弁財天】

■風情ある街並み

駅の近くに「千住街の駅」と書かれた建屋がある。

見た目は昔ながらの団子屋のような店だが、千住の観光案内所の機能を持っており、ガイドは「ここに入れば千住のことは何でも教えてください」と言っている。

そば屋、うなぎ屋、居酒屋などが古い雰囲気そのままに残っている。さすがに江戸時代とまでいかないまでも、それなりに古いので何となく癒される。



【千住街の駅】

■富嶽三十六景

富嶽三十六景「隅田川関屋の里」の看板がある。看板の画を見ると、川が流れていて旅人が堤防を馬で駆け抜けて、彼方に富士山が見える。現在とは明らかに違う景色に参加者たちは驚いている。

言うまでもなく、富嶽三十六景は江戸時代後期に葛飾北斎が描いた富士山の版画集で、当時の江戸の様子を知ることができる。

千住にはこの画の他に富嶽三十六景がもう2枚あると書かれている。



【富嶽三十六景「隅田川関屋の里」】

ちなみに富嶽三十六景は36画だと思っていたが、実際は46画あるという。36画の評判が良かったので10画追加したというから、今はよくある話だが、昔もやっていたのかと感心する。

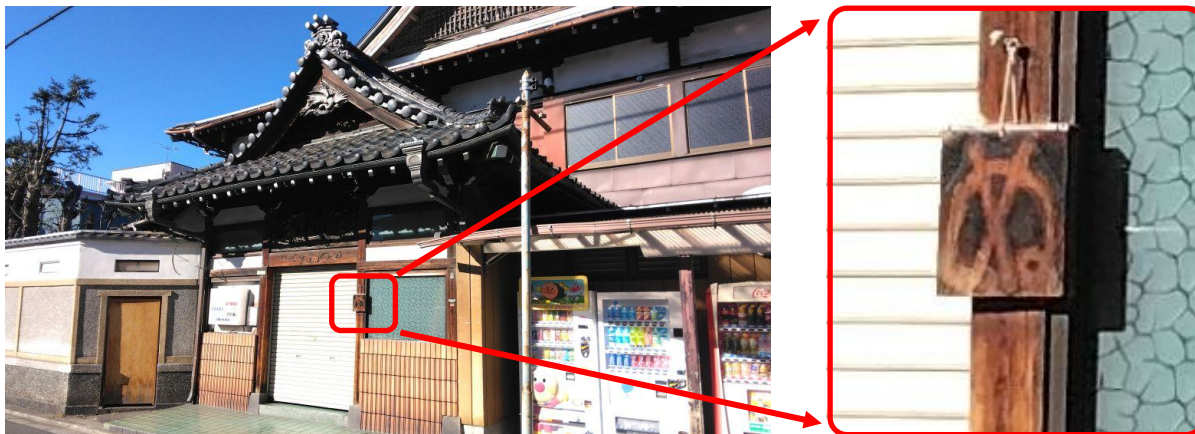
富嶽三十六景の約70年後、尾崎紅葉が新聞に連載した小説「金色夜叉」も同様に、前編・中編・後編までで一応区切りがついているのに、その後に付け足しのように続、続続、新続と続けた。それゆえ全体のストーリーは何が何だか分からなくなっている。

■タカラ湯

次に大きな古い家の前にやって来る。そしてガイドは家の入口の前に立って「ここはタカラ湯という銭湯で、女優の石原さとみがPRした銭湯です」と教えてくれる。説明では、「中に日本庭園があって風呂上りに縁側から見る庭園が素晴らしいので、“キングオブ縁側”と呼ばれています」とのことだ。

さらにガイドは入口にかかっている木の板を指差して、「これ何だか分かりますか？」と参加者たちに聞いてくる。板には“ぬ”の文字が書かれており、ガイドは「昨夜お客が帰って、お湯は抜いた（ぬ板）状態です」と言っている。次にその板を裏返すと今度は“わ”の文字が書かれている。すると参加者の誰かが「お湯が沸いた（わ板）でしょう」と言うと、皆感服している。

こんなところにも当時の“江戸っ子の粋”が残っているから面白い。それにしてもこれはガイドがいないと気付かない。



【銭湯タカラ湯 入口の“ぬ板”】

七福神を巡りながら古き良き千住を知り、そして楽しめるように行程が組まれてくる。私はこの街道沿いの宿場街の雰囲気が入ってしまったようだ。

■千住で有名な人、森鷗外

ガイドは「千住では森鷗外が有名で、ここが森鷗外の家跡地です」と言いながら、ある建物を指差している。ガイドは「とにかく森鷗外は、凄い人だった」と言っている。

私は森鷗外についてあまり良く知らないので、調べてみるとやはり凄い人だった。

1862年に津和野の医者家に生まれ、10歳で上京し官立医学校へ入学するためにドイツ語を学び始める。12歳で第一大学区医学校（現東京大学医学部）に入学するが、年齢が足りなかったため、14歳と偽って受験した。

漢方医学や漢詩・漢文にも傾倒し、19歳で大学を卒業、東京陸軍病院へ勤務する。22歳からドイツへ留学し、帰国して陸軍軍医学舎と陸軍大学校の教官を兼任する。

27歳で新聞に小説論を発表し文学活動を開始し、ドイツを舞台にした小説を発表する。軍医と作家の二刀流で活躍し、衛生学の教科書「衛生新編」や文芸雑誌「めざまし草」を創刊する。

47歳で文芸雑誌「スバル」に作品を連載し、東京帝国大学から文学博士の学位を授与され、その後も数多くの小説を執筆するかたわらゲーテなどの外国文学の翻訳も行った。

57歳で初代帝国美術院長を務め、元号の考案に着手、1922年60歳で没す。

私は理科系の学校を出てエンジニアとして40年過ごした。それゆえ友人から「おまえの旅行記は研究レポートだ」と言われたことがある。やはり理科系の人間にとって文学は難しい。

鷗外は医者で翻訳家、文学博士になった。近代日本にそんな人がいて、その彼が千住に住んでいた。鷗外を想いながら街を歩くと一味違ってくる。

■松尾芭蕉

足立区生涯学習センター「学びピア」という施設で休憩をとる。そこにはなぜか松尾芭蕉の座像があって、「おくのほそ道」の行程が示されている。

芭蕉の住む芭蕉庵は深川にあり千住に住んでいないが、旅に出立する時に隅田川を船でのぼり、仲間たちに見送られ千住から旅立ったからだという。これは少し強引かもしれない。

芭蕉は1644年に伊賀で生まれ、若い頃から俳諧で認められる。31歳で江戸に移り、各地を旅し俳句を詠み記録を残している。ただし各地といっても関西から東海、関東周辺だった。

おくのほそ道は、未踏の東北や北陸を巡るために46歳の時に弟子の曾良と旅に出た。出発は1689年5月16日（旧暦3月27日）、155日間かけて2400kmを旅した。

旅の目的は俳句を詠むことと松島や平泉、象潟（きさかた）など和歌に出てくる名所旧跡を巡ることだった。象潟は秋田県かほ市象潟地域で、今は陸地だが昔は入り江で島々が浮かぶ風光明媚な景勝地だったから「東の松島 西の象潟」と言われたらしい。

芭蕉は旅をして旅行記を残すという、旅行作家の先人だった。



【おくのほそ道の行程図】

私はこれを見て、このルートを追跡する旅に出たいという気持ちが湧いてくる。

■ 隅田川と荒川

街を歩いていると高い堤防が目にとまる。そして堤防の近くのビルの壁の高いところに、過去の洪水でここまで水が上がってきたと印されている。

ガイドは「ここは荒川と隅田川に挟まれて、大洪水が頻繁に発生しました」と言っている。

時代を遡ると、戦国時代末期に徳川家康が豊臣秀吉から国替えを言われ、関東に移ることになった。その時に家康の家臣は洪水の多い江戸や関東は住めるものじゃないと文句を言っていたという。それでも何とか住めるようになったのは治水工事の賜物ということになる。

その中心的な川が隅田川と荒川と利根川で、調べてみると、これらの川の関係は複雑だ。

古代から江戸時代初頭まで、荒川と利根川が合流して東京湾に流れ込んでいた。確かにそれでは洪水が多くなるのは当たり前だろう。そしてその合流した川を隅田川と呼んでいた。

江戸時代初頭 1629 年、幕府は江戸の街を洪水から守るために大規模な河川改修を行った。

利根川を東に向きを変えて太平洋に流し、荒川を熊谷から南下させて東京湾に流した。つまり荒川が東京湾に流れこんだのだが、何故か江戸周辺になると荒川ではなく、庶民は漠然と隅田川と呼んでいた。

明治時代末期から昭和初期の 1930 年にさらに洪水を防ぐために北区赤羽の岩淵水門から河口まで荒川放水路を建設した。ただしこれはあくまでも放水路で、本流の正式名称は荒川のままだった。それでも庶民は隅田川と呼んでいた。

1965 年に政令によって荒川放水路が荒川に、岩淵水門より下流が隅田川に改称された。これにより荒川は秩父を水源にして入間川などと合流して東京湾に注ぐ 173km の河川になった。隅田川は岩淵水門で荒川から分岐して新河岸川と合流し、その後も石神井川、神田川、日本橋川と合流して東京湾に注ぐ全長 23.5km の河川になった。

このような経緯を知って改めて隅田川や荒川を眺めると、一味違って見えるから面白い。そういえば富嶽三十六景「隅田川関屋の里」でも堤防がメインに描かれていた。

■旅の記録

実施は 2025 年 1 月 11 日（土）、その行程を示す。

- 11:00 北千住駅集合
- 11:33 1 番目 仲町氷川神社：弁財天
- 11:38 隅田川関屋の里
- 11:45 2 番目 河原町稲荷神社：福祿寿
- 11:55 ポンタポルテで 35 分間の昼食休憩
- 12:41 3 番目 白幡八幡神社：毘沙門天
- 12:47 4 番目 千住神社：恵比寿天
- 13:07 桜木町公園
- 13:27 5 番目 元宿神社：寿老人
- 13:35 銭湯タカラ湯
- 13:43 6 番目 大川町氷川神社：布袋尊
- 13:53 学びピア
- 14:14 7 番目 千住本氷川神社：大黒天
- 14:30 北千住駅到着、駅前の居酒屋で打ち上げ

総費用は約 7000 円になった。内訳はガイド料 1000 円、北千住までの交通費が約 1500 円、昼食と打ち上げで約 4500 円になった。

イベントで配られた千寿七福神巡りのパンフレットの地図を参考に残しておこう。



【千寿七福神巡りのパンフレットの地図】